

公益社団法人私立大学情報教育協会
2019年度第1回情報教育研究委員会合同会議議事記録
情報教育研究委員会、情報リテラシー・情報倫理分科会、分野別情報教育分科会

I. 日 時：令和元年6月1日（土） 10：30～12：30

II. 場 所：私立大学情報教育協会会議室

III. 参加者：斎藤委員長、箕ノハヅレ、大原ノハヅレ、玉田主査、和田委員、金子委員、
児島主査、角田委員、阿部委員、渡辺ノハヅレ (Skype)
事務局：井端事務局長、野本（記）

IV. 検討事項

1. ガイドラインの更新について

「情報リテラシー教育のガイドライン」について、主査を中心とした打ち合わせ会で事前に検討し、更新した案を確認した。

- ・ 情報リテラシーの用語を変更してはどうかとの意見から、タイトルを「社会で求められる情報活用能力育成のガイドライン」にすることが確認された。
- ・ 第4次産業革命の進展により、到達目標Cを大きく変更することにし、以下の修正が確認された。

※ 到達目標C

情報通信技術の現状と可能性を考察し、論理的思考に基づき、価値創造に向けて必要となるIoT、モデル化、データサイエンス、AIなどの知識・技能を活用できる。

（データが価値を持つデジタル社会の可能性と危険性を認識し、IoT、モデル化、シミュレーション、データサイエンス、AI、プログラミングなどを適切に活用する力を修得させる。）

※ 到達点を4つにして、下記に修正した。また、その学修方法・内容も合わせて修正した。

1. 情報通信技術の現状と将来的な可能を説明できる。
2. 仮説検証の手段として、論理的思考に基づいてモデル化とシミュレーションなどを通じて予測することができる。
3. データサイエンスやAIを適切に活用することができる。
4. 社会における情報通信システムの在り方を考察することができる。

※ 到達点評価の考え方も更新案を検討し、不明確と思われる表現を議論して以下の通り3点を修正した。

- ・ 具体的な事例のモデル化とシミュレーションを実行させ、説明させる。
 - ・ AIの活用が有効な領域とプログラミングが有効な領域を挙げ説明させる。
 - ・ 社会における情報通信システムについて新しい価値創造に向けたビジネスモデルの発想を提案させる。
- ・ 到達目標Aの到達点評価の考え方の1項目及び到達目標B到達点3の学修方法も変更案が提示され、確認された。

2. ガイドライン更新を確認した際の委員の意見

- ・ IoTがより生活の中に入ってくることを考慮してはどうか。
- ・ モデル化、データサイエンス、AIなどは人間側と考えると、IoTは通信技術側と考えられ、範囲の中に含まれるとの考え方もできるのではないか。
- ・ サイエンスとエンジニアの視点を両方持つレベルにまで高められないか。
- ・ レベルについては、技術系ならばセンサー等を含められるが、文系では理解に壁ができることを考慮して、IoTをブラックボックスとして学んで行く方法も考えられる。

- 例えば、ガイドラインの授業展開に向けて。MOOCs の活用が考えられないか。
- ガイドラインに対応した教育を実施している大学の協力を得て、プラットフォームで公表を行ってはどうか。
- 学生に学びの魅力を持たせるためには、理想の形や具体像を見せて、そのための能力を理解させ、学ばせることが考えられる。例えば、ワクワクさせるような映像教材などが必要ではないか。
- 切っ掛けづくりは、興味を持つテーマを与える方法、失敗させて知識の必要性を理解させる方法なども考えられるのではないか。
- FSP のプロジェクトなどのように、企業データを与えて表計算ソフトを活用する程度のレベルで解決策を考えさせる取り組みをさせてはどうか。
- データ活用を演習させることは、統計的に出た答えを見直すクセや視点を学ばせる必要があり、直観力の育成も含めて、専門分野の授業の中で配慮し、大学全体として考えられないか。また、取り扱うデータは、企業以外に学内データの利用も考えられるのではないか。

V. 今後のスケジュール

- 次年度は、6月27日に合同会議を開催し、授業シナリオの検討をすることになっている。